

活
字
文
化
の
展
望

阿
部
芳
治

一、序 言

二、活字文化の浸潤

- 1・読む物の汎濫
- 2・読む者の擴大
- 3・読む力の増進

三、活字文化の特質

- 1・新聞の威力
- 2・雑誌の主潮
- 3・圖書の壽命

四、企業としての活字文化

- 1・新聞事業の營利
- 2・雑誌刊行の採算
- 3・圖書出版の收益

五、活字文化の將來

- 1・新聞のトラスト化
- 2・雑誌の大衆化
- 3・圖書の専門化

六、結 言

一、序

言

朝起きると既に新聞が待つてゐる、郵便の配達される度に何か印刷物が加はつてゐる、毎月ほど定期的に雑誌が手許にとどく、出版広告はなやかなるに惹かれては圖書を購つてもみる。かくして日常生活、紙とインキとを離れることのできないのが世相の一面である。「且に蝦夷松の喬木、夕に新聞となつて街頭に賣らる。」製紙事業の製産工程と、新聞製作のスピード・アツプは、文字通りこれを可能にする。昨日の講義が今日の冊子となるくらいは何でもない、今夕の宣言は定時に先つて夕刊に發行される、明日の講義が既に昨日の圖書であつたりすることもある。

歴史はじまつて以來、文字の表現と印刷の手段は著しい變遷を遂げてゐる。結繩文字から、象形・表意・表音文字の現代に發達して來て、これを印刷するに雕版・銅活・木活の時代から、現代の活字常用に及んでゐる。印刷用紙と印刷機械もまた常に進歩を續けてゐる。樹皮・樹葉の利用から、木質纖維を重用する現代となり、用紙の大きさも自由に製造されて卷取紙といふ形式が生じ、これに伴ふ印刷機械もまた原始的な手刷から、平盤・輪轉機・連絡高速度輪轉機と能率を上ぐるに及んで、立派に企業として營利的經營に堪ゆるまでに至つた。現に印刷物の普及は、全く汎濫と稱すべき程度にある。

むかし印刷物は極めて貴重であつた、著作は手寫によつて傳へられなければならなかつた。いま餘りにも容

易に有らゆる原稿が活字化される。讀む資料の不足を憂へず、たゞ讀むための選擇に苦しむといふ盛況である。それゆゑ選擇眼さへ確であれば、これほど文運に恵まれた時代もない。しかもその選擇眼を養ふことこそ教育の效果に待たなければならぬのである。

然らばこの印刷物汎濫の主流は何であらうか。

第一に新聞を擧げる。大阪には百萬内外の發行部數を維持するもの二紙、東京には六十萬以上を維持するもの二紙、十萬以上を維持するものは地方的にも二、三紙を數へることができる。これが毎日發行され、しかも朝・夕刊が別々に配達されるときに、その讀者に働きかける印象の強度は言ふまでもない。新聞としての實質的勢力を有するもの、全部を通じて毎日一千萬部に達すると算出して誤らぬであらう。

第二に雑誌を擧げる。二十年前、十萬の發行部數を有すれば驚異であつたものが、現在ともかく五十萬内外の定期發行部數を維持するもの二誌、三十萬内外のもの五、六誌をも數へ得る時代となり、十萬内外のものは餘り稀らしくもない。但し雑誌に於ては程度の低いものほど普及が廣い。謂ゆる娛樂雑誌・婦人雑誌・少年雑誌に屬するものが大部數であつて、實質的に雑誌界の首腦たるべきものは、案外普及してゐない。ともかく雑誌らしい雑誌として世間に送らるゝもの、毎月約七百萬を下らないであらう。

第三に圖書を擧げる。種類が極度に分化し、發行が時間に制せられず、隨つてまた景氣に左右されること甚だ多いのであるが、それでも毎月平均二千種に近い新刊書が現れ、その中の三百種内外が店頭にならべられ

る。單行本の發行部數は普通單價が極めて低く、煽情的な販賣手段による俗書を除いて、一版平均一千五百部を超えないであらう。尤も昭和初期、謂ゆる圓本の創始時代、出版者自身が驚嘆する大部數を刊行したやうな事實は一時の熱病であるが、それにしても現に豫約出版物百八十種を數へるのであるから、再版以下の届出を要せる分をも算出するならば、毎月供給される圖書は五百萬内外に上るであらう。尤も特殊の立場にあり、かつ新刊にあらざる國定教科書の類は考慮に入れてない。

筆者はこの新聞・雜誌・圖書の三者の活動する狀態、讀者に作用する情況を指して活字文化と名づくるのである。學校教育と併んで、或はこれを超えて、社會教育の最も有力なる方面が、この活字文化に依存してゐる。もとより右の三者以外にも、各種報告書・宣傳パンフレット・内容見本・非合法出版物から、謂ゆる怪文書と稱せらるゝものに至るまで、各種の無料印刷物を數ふことができる。これらが活字文化にまきり寄與しないといふのではない。しかし多くの無料印刷物は原則としてそれ自身の價值を以て世に問ふのではなく、これらを通じて背後にあるものを販賣する意思、またはタメにするところある特殊の効果を覬つてゐるのである。活字文化の本道から排した所以である。もう一つ、新聞面の五割内外を塞ぎ、雜誌頁の相當量を侵してゐる廣告といふ存在も顯著であるけれども、これまた活字文化には加へない。要するに印刷文化から宣傳文化を差引いたものを活字文化として取扱ふのである。

近來、ジャーナリズムに對する世人の關心は相當に深まつてゐる、その研究資料も、かなり多く出版されて

ゐる。謂ゆる大學新聞の中にはジャーナリズム實驗室として相當の成果を示してゐるものさへある。しかしジャーナリズムの主體はどこまでも新聞であつて、雑誌は半身をこの潮流に浸してゐると共に、他の半身は全くその埒外にある。圖書に至つては、書誌學的研究は積まれてゐても、現在の出版傾向・情勢について何も説かれてゐない。即ちこの「展望」の期するところは、雑誌・圖書の正體をも、新聞の程度まで明るみに出す機縁を作りたいといふにある。たゞ頁數の制限と、時間の制限と、更にまた筆者の能力の制限とが、これを充分に果し得られさうもなく、徒らに一掃的になるかも知れないことを、前以て諒恕を得ておきたい。

主として眼、から頭に入る文化——活字文化から、やがて耳、から頭に入る文化——ラジオ文化の類が發達する時代が遠からず來るであらうと豫期される。耳からする目的の表現法が特に發達する時期があらうと想察される。現に新聞のニュースに屬する部分の如きは、時間的に空間的に、ラジオ放送によつて素晴らしい効果を擧げてゐる。學校教育の或る部分の如きも、ラジオ放送を通じて一層能率的になる時代が來るのではないかと期待される。しかしこのラジオ文化は瞬間的記憶の文化である、活字文化は永久的記録の文化である。音樂・演劇と、樂譜・脚本との差異がある。假に實演に適しないとしても、また如何に複雑なる表現を要するものであつても、活字文化はこれに堪へ得る。こゝに侵し難き價值が儼存してゐることは明瞭に言ひ得るのである。

二、活字文化の浸潤

活字文化の社會的浸潤に最も好都合なる渠を作つたのは、印刷工業の發達と相俟つて出版の容易になり、かつ大量に製産し得るやうになつたことである。この供給も、後述する如く人口の増加・教育の普及に伴ふ需要と相關的なることは當然であるが、實に、明治二十七、八年の日清戰役、明治三十七、八年の日露戰役、大正三年の世界大戰勃發と、ほぼ十年毎に起つた對外戰爭は、常に活字文化への要求度を強める一方であつた。大正十二年の關東大震災は、偶々戰爭以外のその後の十年一期を劃して、活字文化の上に相當な變化を與へつゝ、同じく讀む物の供給を多くする機會となつた。

次に、三十餘年間出版物累數の跡をみよう（次葉所掲）。

讀む物の増加はまた、讀む者・讀む力の増加と因果關係があるのだから、こゝに切離して説くことは不適當であらうけれども、便宜上、項を分つて筆を進めることにする。

1・讀む物の汎濫

發達の初期に於て政治的主張の機關であつた新聞は、やがて營利主義に立脚する報道機關に轉向して生活の一必需品化すると共に、個々の新聞には表裏があるにしても、總體に於ては發行部數が常に膨脹し續けてゐる。雑誌もまた、大衆の通俗趣味に媚び、女性の流行心理に投ずる分野を開拓すると共に、著しく購讀範圍を擴大した。この二大定期刊行物と共に、圖書出版の旺盛もまた、謂ゆる圓本時代の當初に於て最高潮に達した觀がある。

第一表

出版圖書數(雜誌を含む)累年比較表			
年次	出版圖書數	年次	出版圖書數
明治十四年	五、九七五	明治二十七年	二七、五二〇
明治十五年	七、六四八	明治二十八年	二六、一七〇
明治十六年	九、四六二	明治二十九年	二五、五七六
明治十七年	九、八九三	明治三十年	二五、五三三
明治十八年	八、五九七	明治三十二年	二〇、八一四
明治十九年	八、一〇五	明治三十三年	二一、四三五
明治二十年	一〇、四五五	明治三十四年	一八、二八一
明治二十一年	一二、七二八	明治三十五年	一八、九九八
明治二十二年	一五、一二五	明治三十六年	二二、九五〇
明治二十三年	一八、七二〇	明治三十七年	二四、二九六
明治二十四年	二三、五六八	明治三十八年	二五、六〇三
明治二十五年	二二、四四九	明治三十九年	二七、〇九五
明治二十六年	二六、四一五		二八、三一九
		明治四十年	二九、一〇九
		明治四十一年	二八、五二三
		明治四十二年	三四、一二三
		明治四十三年	四一、六三〇
		明治四十四年	四三、二四四
		大正元年	四五、二八六
		大正二年	四四、五一六
		大正三年	四六、五六三
		大正四年	四九、一八一
		大正五年	四九、九〇三
		大正六年	四六、〇一二
		大正七年	四八、九四七
		大正八年	四七、二五四

大正九年	四四、二七六	大正十三年	四七、五三九	昭和三年	六〇、二七九
大正十年	四五、八九三	大正十四年	五六、五〇八	昭和四年	六八、八五四
大正十一年	四八、四〇四	昭和元年	五八、九七一	昭和五年	七二、二五四
大正十二年	三九、九五〇	昭和二年	六三、二五八		

(註) 内閣統計局調査に據り、内譯を示さず總數のみを掲ぐ。

その内譯は明治二十四年まで著述・翻譯・編輯・反刻の四種、同二十九年まで著述・翻譯・編輯の三種、大正九年まで著作・翻譯の二種に分ち、以後は普通出版物として一括す。

なほ、明治四十三年より雜誌を、大正七年より更に官廳出版物を別に調査して、この總數に合算する方法を採る。

昭和五年の總數七二、一五四の内譯は、圖書(普通出版物)二二、四七六(後出、第五表參照)、雜誌三九、三三九(後出第四表參照)、官廳出版物一〇、三三九である。

新聞に就ては後出、第三表參照。

單に讀む物——新聞發行、雜誌・圖書出版の數量が増加したばかりでなく、一部當の讀む分量も増加したことも見のがし難い。その一證として、印刷に使用せらるゝ活字の段々小さくなつて行く傾向を指摘し得るだらう。これはポイント活字の新鑄と、照明の光度増加とに伴ふものであるが、同大の頁面に於ける字詰の關係は著しい變遷を示してゐる。今「東京朝日」の實際を一例にて示せば、次の如くである。

第二表

東京朝日新聞字詰累増表

年次	一行字詰	一段行數	一頁段數	一頁總字數	備考
明治二十一年七月	二〇字	五三行	六段	六、三四〇字	一部四頁、一ヶ月定價二十五錢
明治二十四年八月	二三	五八	六	七、六五六	一部六頁
明治三十年一月	二三	五八	六	七、六五六	以後八頁、夕刊を出し八月廢止、一ヶ月定價三十七錢
明治三十七年三月	二三	六〇	六	七、九二〇	
明治三十八年一月	一九	六〇	七	七、九八〇	
明治四十一年十二月	一八	六六	八	九、五〇四	
大正三年四月	一七	七三	九	一一、一六九	
大正六年九月	一六	七三	一〇	一一、六八〇	一ヶ月定價四十五錢、後六十錢となる
大正七年七月	一五	一三三	一一	二一、七八〇	
大正八年三月	一五	一三三	一二	二三、七六〇	
大正十年二月	一五	一三三	一二	二三、七六〇	以後十二頁、一ヶ月定價一圓十錢
昭和二年四月	一五	一四七	一二	二六、四六〇	
昭和三年四月	一五	一五五	一三	三〇、二五	

(註) 昭和三年八月、東京朝日新築記念「新聞に關する歴史展覽會」の出陳に據り、内容を取捨して作製す。

大正六年九月までの字詰はルビ附にて計算されたものゝ如し。同七年七月以後も同様、ルビ無に換算する場合は五割を増すことゝなる。

備考欄に記入せる以外にも屢々定價の變動あり。現在は既に十四頁の時代なるも定價は却つて一ヶ月九十錢に引下げらる。なほ時に増頁する場合少からず。

即ち初期の一頁と比較して現在の一頁は、五倍に近い收容量を有する。しかもその一部の頁數自體が四頁時代から十四頁標準にまで進んだのであるから、全量の激増は意想の外である。尤も初期時代は、現在の如き大みだし、傍みだしに多くの行數をつかつたり、寫眞版・凸版を自由に使用したりすることが少く、かつ廣告掲載量も低率であつたから、この字詰と頁數との増加比例が直に讀む物の増加であるとは言ひかねる部分もある。

雜誌の場合でも、これを「婦女界」に徴するに、大正初期に於て五號活字の常用されてゐた當時は、二十三字詰・十八行・二段で一頁八二八字詰であつたのが、九ポイント活字になると、二十字詰・二十一行・三段で一頁一、二六〇字詰となり、更に現在の八ポイント標準では二十字詰・二十四行・三段で一頁一、四四〇字詰となつた。即ち五號活字時代の七割五分以上の増量である。しかも同時に一部の頁數自身が著しく増加してゐるのであつて、當初、百四、五十頁の内容を有するに過ぎなかつたものが、現在の四百八十頁程度を通例とするに比較すると、實に今の一冊は昔の五冊あまりに匹敵する。

普通の圖書と圓本との字詰を比較しても、例へば志賀直哉の「朝の光」は三十六字詰・十二行で四三二字詰（四六判）なのに、「現代日本文學全集」で讀むとするに、二十一字詰・二十四行・三段（菊判）で一、五二字詰であり、一頁に約三倍半つまつてゐる。また岩波版の「芥川龍之介全集」は四十三字詰・十四行で六〇二字詰（菊判）なのに、「明治大正文學全集」では二十三字詰・二十二行・二段で一、一四四字詰（四六判）となり、判型は小さいのに却つて二倍に近い内容をもつてゐる。但し、簡淨を極めた、含蓄に富む文藝作品が、詰込一方の窮屈な紙面から快く讀みとり得るかどうかは、自ら別問題である。

ともかく、現在の如き不況時代に於て、眞つ先に「緊縮」されがちの頭腦の食糧であるから、新聞・雜誌共に、二流以下の經營が如何に困難に陥つてゐるか、また讀む物の製産過剰によつて如何に讀まれぬまゝに無駄に堆積してゐるか。これは計量の外におくより仕方がない。

2・讀む者の擴大

讀む者の増加は、單純に、人口増加の趨勢と結びつけても差支あるまい。「三千餘萬兄弟共よ、守れに守れ——」と、小學生が唱つた時代、「四千萬の水夫乗する、海の國なる——」と唱つた時代、これは三十年乃至四十年の過去にしかすぎない。然るに大正十四年の國勢調査には五九、七三六、八二二といふ人口に達し、昭和五年のそれに於ては六四、四五〇、〇〇五に増加してゐる。更に臺灣・朝鮮・樺太の新領土人口をも加算すると、正に人口九千萬を超ゆるものがある。この著増しつゝある人口が、教育に於ても恵まれてゐる以上、讀む

者の擴大は、もはや多言を須ゐない。こゝに人口統計を轉載すれば、それが何より雄辯に事實を物語るであらう。

尤もこれを、もう少し具體的に説明するならば、圖書館の増設狀況に、またその閱覽者増加數に顧るもよからう。また側面から、新聞販賣網の徹底、書籍商組合員の累増によつても窺ひ得るであらう。また圓本全盛時の豫約申込者總數三百萬と概算し得るにも徴すべきであらう、豫約申込者必ずしも配本購讀者にあらずとしても。

要するに、新聞・雜誌・圖書を通じて、毎月二千萬に上る讀む「物」の發行・出版が概算されてゐる、即ち少くとも二千萬の讀む「者」を假定することができ、内地人口の三分の一、一戸當二種は供給されてゐるわけである。しかも新聞・雜誌の類は、一人に讀まるゝよりも家族と共に讀まるゝことが多いから、讀む者の實數は、もつと増加するであらう。活字文化の影響全く輕視すべきではない。

3・讀む力の増進

讀む力の増進は、これまた單純に、教育機關の發達を學校數増加の統計に假りて發表すれば、それにて足るであらう。小學兒童就學率の甚だ高きを誇り、壯丁中の文盲者割合は〇・五二％に過ぎない我國では、何人も新聞と雜誌とに或る魅力を感じ得るであらう。學校總數は約四萬七千に近き事實、その在學生の千二百萬を越ゆるといふ事實は、讀む力の増大を明瞭にしてゐる筈である。尤も學校總數の五割五分は小學校であり、在學

生の七割八分は小學生であるにしても、ともかく内地人口の二割強が、現に學校教育を受けてゐるのである、心強く感ぜざるを得ない。

しかしまた、その讀む力は必ずしも深さを伴つてゐないかも知れない、と考ふるときに、一沫の淋しさを感じざるを得ない。たゞ少くとも、深さを掘り下げて行く素地を與へられてゐることだけは言へるであらう。この讀む力の深さを必然的に豫想し得る高等教育機關もまた、大正中期以來の専門教育大擴張實現によつて、その半面を豫想し得ないでもない。これを高等商業學校のみに見るも、現に二十年の昔、小樽高商開校當時は、東京・神戸・長崎・山口の四校に過ぎなかつたものが、今は大學昇格の東京・神戸を除いてなほ十一の官立校を數ふるが如き、その一例である。大學四〇、高等學校三一、専門學校一五三（内、實業専門學校五一を含む）といふ數字は、もはや校名を誦んずることができない程度に多いのである。

但し、新聞・雜誌を唯一の「讀書」とするのが大多數の現状である限り、逆に言へば價值ある圖書の發行部數が案外少いものである限り、その大衆性・通俗性を計る一般水準の案外低いものであることは争ひ難い。殊に宣傳効果を主力として大量の部數を消化し盡さうといふ場合、その内容が大衆の要求程度より高きに過ぎては、何の見るべき成績をも示し得ないだらう。たゞ如何に割引しても、現ジェネレーションが、前ジェネレーションよりも讀む力が下位になつてゐよう筈のないことは斷言できる。

三、活字文化の特質

新聞・雑誌・圖書について、その夫々の本質を周到に検討せんとするならば、その發展過程を歴史的に跡づけ、各時代に於ける特質をも究明しなければならない。あらゆる文化は、往々にしてそれ自體の意識しなかつた方面に發展し、或は解消し、その特質も常に時代と共に動いてゐるからである。こゝにはそこまで論及する邊がないから、大體、活字文化の現狀に於て如何なる特質を有するかを展望するに留めざるを得ない。

1・新聞の威力

こゝに新聞の本質乃至使命・機能を組織的に説かうとは思はない。それらに對しては既に定説があつて、あらゆる新聞研究書の所論以上に加ふるところがないからである。

新聞は夙く、操觚者としての指導的立場から自由になり、一方にはニュースの敏速と正確とを目標とし、他方そのニュース自體の價值と興味との優劣に専念する、報道的立場を守るやうになつた。これを經營上より見ると、一派の機關たる立場を揚棄して、販賣收入・廣告收入を目標とする營利主義に立脚することゝなり、主筆本位の個人中心編輯方針より、論說委員班と「足で書く」多數の記者とを有する綜合編輯方針を採用するに至つたのである。

新聞がニュースを本體とする以上、その通信機關の完備によつて、分秒も最近であるところの、そして多數

者の興味を惹くと信ずる記事を供給することとなり、また記者の素質の向上によつて、時代意識を取入れつゝ、快適に編輯されたる紙面を提供すればよいことになつた。随つて新聞には餘り多くの種類を要しない、常に最上の新聞があれば足りる。たゞその好敵手たる競争者は、相互進歩の手段として必要であるが、次善以下の新聞の存在價值は甚だ稀薄なものであると斷じて誤らないと思ふ。

但し東京・大阪に發行さるゝ謂ゆる中央紙と相對して、それ以外、所在の大・中・小都市に發行さるゝ謂ゆる地方紙は、その地方色を濃厚に反映するところに存在價值がある。しかも交通機關の發達により、地方紙の中央紙に脅かされる程度は將來一層甚しいものがあらう。現に地方紙と中央紙と同日々附のものを手にし得る距離にあるときは、中央紙の地方版が、その特別頁に於て相當に地方色を發揮し、以て地方紙を蠶食する基礎を作る。しかもなほ地方紙としては、その特色の一として、中央紙に於ては既に清算されたる政黨的色彩を未だに帶びてゐることを免れない。人口四、五萬の都會にしてなほ二紙以上の存在するあり、鎬を削つて競争しつゝ相互の經營を困難にしてゐる。

結局、大阪系の四紙、即ち「大阪朝日」と「東京朝日」、「大阪毎日」と「東京日々」が轡をならべて前進し、その他の新聞との間に愈々離を作る傾向を顯著にしてゐる。そして、この一流紙の型を追ふ新聞は、いづれ倣つて及ばざるものであるから、自ら一層窮境に逐詰められるに至り、却つて二流紙の立場から特殊の色彩を維持する新聞・中央に發行されながら地方的である新聞が、併讀紙として安全地帯に留まり得るかも知れな

い。筆者は新聞界の現状をかく展望する。

然らば新聞は過去に如何なる伸展をなし、現に幾百種存在してゐるだらうか。次の第三表（次葉所掲）がこれを語る。但しこゝに新聞とは新聞紙法により發行せらるゝものを綜合し、新聞の名に於て雑誌も包含されてゐる。やがて施行さるゝ出版法にはこの兩者の明瞭なる分類を見る筈であるが、今は日刊とそれ以外のもので新聞と雑誌との區別をすることが大體の標準とならう。

これによれば、新聞紙法による新聞・雑誌が、何人の豫想にも超えて現に約一萬種の多きに上つてゐるわけである。しかも有保證金の日刊約一千種が謂ゆる新聞の名を冠せらるべきものであるが、更にこの中から新聞の名に値するものを選べば、「廣告年鑑」昭和六年版（萬年社版）に於て、廣告媒體たるべく認めてゐる三百七十六紙（内、殖民地發行三十九紙を含む）に減少し、更に「新聞總覽」昭和六年版（日本電報通信社版）に於て、廣告統計をとりつゝある百十五紙（東京十四紙、大阪三紙、地方九十八紙）に限局される。なほまた雑誌・圖書出版業者が主として廣告掲出に利用する新聞を數ふれば五十種内外まで縮少される。結局、世間を動かしてゐる新聞の種類は、案外の少數であるといふことに歸着する。

さてこの少數の新聞、しかし多數の發行部數を有する新聞の社會的威力、これも識者に論じ盡されてゐる。日刊といふよりも、朝・夕刊の半日刊とも稱すべき繰返しの威力は、その報道の如何なる種類をも問はず、讀者に強烈なる印象と、所報に向つて動く作用とを及ぼさずにはおかない。新聞はニュース本位とはいへ、その

第三表

新聞數(雜誌を含む)累年比較表(年末現在數)			
年次	總數	有保證金の分(括弧内は日刊)	無保證金の分(括弧内は日刊)
明治二十八年	七五三	二六九	四八四
明治二十九年	七七五	三〇一	四七四
明治三十年	七四五	三三三	四一三
明治三十一年	八二九	三八一	四四八
明治三十二年	九七八	四八九	四八九
明治三十三年	九四四	五三五	四〇九
明治三十四年	一一八一	六五八	五二三
明治三十五年	一三三八	七四四	五八四
明治三十六年	一四九九	七八五	七二四
明治三十七年	一五九〇	八一七	七七三
明治三十八年	一七七五	九〇六	八六九
明治三十九年	一九八八	九九五	九九三
明治四十年	二二〇〇	一一八五	一一二五
明治四十一年	二五二四	一二七六	一二四八
明治四十二年	二七六八	一三七九	一三八九
明治四十三年	一七九三	一二七三	六三一

明治四十四年	二、〇七七	一、三二六	七五一
大正元年	二、二二七	一、四二二	八一五
大正二年	二、六四七	一、六二一	一、〇三六
大正三年	二、七一九	一、六三六	一、〇八三
大正四年	二、八五一	一、七六七	一、〇八四
大正五年	三、〇六六	一、九五〇	一、二一六
大正六年	三、〇一八	一、九九七	一、〇三二
大正七年	三、一二三	二、一四二	九八一
大正八年	三、四二三	二、六三九	七八四
大正九年	三、五三二	二、七〇四	八三八
大正十年	三、九八〇	三、〇五六	九二四
大正十一年	四、五六二	三、四〇三	一二五九
大正十二年	四、五九二	三、六〇三	九八九
大正十三年	五、八五四	四、一八四	一六七〇
大正十四年	六、八九九	四、七三九	二一六〇
昭和元年	七、六〇〇	五、〇八九	二、五二一
昭和二年	八、三五〇	五、四三八	二、九二二
昭和三年	八、四四五	五、四八二	二、九六三
昭和四年	九、一九一	五、九一七	三、二七四
昭和五年	一〇、一三〇	五、九九五	四、一三五

(註) 内閣統計局調査に據り、保證金制度を施かれたる明治二十八年以後の分を示す。

有保證金は一定の保證金を納入して時事問題に互り掲載評論し得る新聞・雜誌。無保證金は學術・技藝・統計等に限り時事問題に觸るゝを得ざるもの。

明治四十三年總數の激減せるは廢刊分を精査整理せるに因る。

大正四年までは日刊の内譯統計なし。

何を報道するか、何う報道するか態度によつて、自ら指導的でもあり得るのであり、殊にそれが、信賴厚き一流紙である場合には、一世の方向を新聞紙面の活字の力によつて左右することすら可能に見える。新聞への對策が爲政者の最大關心事の一となつた所以である。

しかし筆者は、新聞を常に有力なる參考とせよ、盲從する勿れ、と主張する一人である。時間に制限せられ、かつ人間によつて製作される記事が、正確に事實そのまゝであり得よう筈はない。これは記事の渦中にゐる當事者が新聞を読むとき、誰しも思ひ當ることである。さればとて、新聞が常に重要な素材を提供してゐることに間違はない。木を見て林を見ざる世人は、新聞が常に歴史記錄として缺くべからざる役目を果してゐるにも拘はらず、讀者がよくそれを意識して頁を翻してゐるかどうか怪しまれるのは遺憾である。例へば、一九一四年、世界大戰勃發以後の歴史的・地理的・思想的大轉變は、新聞の洩れなき報道にも拘はらず、果して幾パーセントの讀者が、新聞からその歴史的輪廓を攝取し得たであらうか。惜むべきこととして常にこれを疑ふ一人である。

ともかく新聞は、營利を忘れ得ないがために、大衆性を獲得すべく時に讀者の前に意外の媚態を呈すること

があるし、その社會奉仕的「催しもの」さへ販賣擴張の間接射撃であり、社名宣傳の示威運動である場合を免れないとしても、これは一の餘弊に過ぎない。もし新聞の有らゆる紙面を縦横に理解し得るならば、實に最高常識の供給を受けてゐるものであることを感謝すべきであらう。最高といへば、常識としても既に常識以上であり、社會面愛好の通俗性に留まるものでないことを指摘しておきたいと思ふ。

2・雜誌の主潮

第三表に於て指摘せる如く、名は新聞紙法によりて發行されながら、雜誌として通用するものが、新聞とは比較にならぬほどの多數である。日刊以外の新聞を差引いても有保證金の分は約四千種、無保證金の分もほど同數に近く、合計八千種が日刊以外の様式を備へた何物かであり、この中に多數の雜誌を含むことになる。今、雜誌のみを區別して調査せる統計を示せば次の如くである(次葉所掲)。

しかしこの中から、眞に雜誌として通用する程度のものを選び出せば、新聞に於けると同様、案外少數に歸着する。大取次店として東京堂に於て取扱ふ雜誌は、五年末に於て七百八十五誌(内、二十九誌を除き全部月刊)であり、同じく北隆館の最近の雜誌目錄によれば六百三十四種であり、「廣告年鑑」昭和六年版に、廣告媒體として採り得べきものを紹介してゐるのは二百十誌に低下する。更にこれを、各地書店の店頭に普通見受けられ、特に月極購讀でなくとも手に入る種類は七十誌内外に留まり、田舎の雜誌店にも必ず見らるゝものに至つては二十五誌以上を發見することが難い。しかもこの少數の雜誌が、文字通り一騎當千の發行部數を壟斷し

てゐるのである。

第四表

出版雑誌數累年比較表			
年次	出版雑誌數	年次	出版雑誌數
明治四十三年	一八、七三二	大正六年	二四、一八五
明治四十四年	一九、六二二	大正七年	二五、一九五
大正元年	二一、三三七	大正八年	二五、九四〇
大正二年	二一、三三五	大正九年	二五、四二二
大正三年	二一、七二六	大正十年	二一、〇九七
大正四年	二四、七三三	大正十一年	二一、五九四
大正五年	二五、三四二	大正十二年	一八、四〇八
		昭和元年	二五、四三三
		昭和二年	二五、六三六
		昭和三年	二九、二九〇
		昭和四年	三三、七一五
		昭和五年	三三、六九二
			三七、四〇二
			三九、三三九

(註) 内閣統計局調査に據り、出版圖書中より雑誌を別に調査開始せる明治四十三年以後の分を示す(既出、第一表参照)。

雑誌には月刊のもの多きを以て、毎月繰返し算入せられたることを豫想せられ、第三表の如き年、末現在數とは一致せざることとなる。

雑誌の主潮に展望の眸を放つとき、如何にしても閑却することができないのは、講談社(正しくは大日本雄

辯會講談社）發行の諸雜誌である。それはピラミッド型讀者層の底、部に近い、大衆を覘つた編輯方針と、俗耳に入り易い販賣政策とによつて、ともかく驚くべき多數の讀者の支持を得てゐる。謂ゆる名士を利用して自由に提灯を持たしたアクどい宣傳、エクスクラメーション・マークが一種の廣告に平均三十以上もあらうといふ「これでもか」式の文案、しかもこの方法に共感せぬ程度の有識者は、初めから彼社の讀者ではない筈である。大震災以後「キング」が出現して、一時は確實に百萬を超ゆる讀者を捉へ、我國最大多數の新聞をも後方にする普及を見た事實は否定し得ない。これは實に當業者も夢想し得なかつた發行部數單位であつて、從來雜誌購讀の習慣がなかつた讀者層を開拓した販賣力に至つては、編輯方針に批判の餘地があつても、その功績を多としなければなるまい。後に圓本出版の採算を可能にする先驅的地均しになつたことも確である。

しかし流石に、ニュース本位の新聞に於てこそ「賣れる新聞が良い新聞」と概して言ふことができるけれども、細かく種類の分化してゐる雜誌界に於ては、賣れる雜誌が必ずしも良い雜誌ではない。この點、新聞の立場とは異なるものがある。營利本能に盲目となつた出版業者にとつてのみ、「儲かる雜誌は良い雜誌」なのである。

次に同じくピラミッドの低層近く覘つてゐるもう一つのものに婦人雜誌がある。これは婦人雜誌の名によつて實は男性も讀むのである。家庭に入つた婦人雜誌は、主婦と共に主人も頁を繰る、そして娛樂雜誌なみに興味を持ち得るやうに、さういふ部分を多量に含めて編輯されてゐる。現に競争の最も激烈を極めてゐるのは、

この婦人雑誌の分野である。

同じくピラミッドの低層にある他の一つは少年雑誌である。これは幼年繪雑誌・幼年讀物雑誌・少年雑誌・少女雑誌と分化してゐるが、餘りにも年少者の感情を甘やかす編輯振であることが不安に堪へない。その内容に於ても、幼年者の手にするものほど、嚴重な意味で雑誌と言ひ得るかどうかわからない。單純な月刊繪本であり、或はお伽噺集である。そして懸賞で釣つて行くといふ不純な販賣政策・仰々しい附録によつて買はせる邪道の營業方針が、ついて廻つてゐる遺憾を禁じ難い。

ともかく、これら餘りにも厚化粧をもつて媚びてゐる娛樂雑誌・婦人雑誌・少年雑誌が主潮をなしてゐることに、慊らず思はるゝ讀者も少くないであらう。別に青年雑誌・評論雑誌・文藝雑誌・綜合雑誌の立場がある。「中央公論」、「改造」の如き綜合雑誌は先づピラミッド中層以上の讀者を覘つてゐるのであるが、内容に於て、左翼出版發賣禁止の標準とされる中庸的存在であると稱してよからう。

元來雑誌とは、固定した一誌の名に於て、每號變化した内容を提供する圖書である、全く一と月毎の勝負である。月刊といふ立前である限り、一時的休刊の如き、または發行部數激減の如き、製産調節の便法なるに似て、實は致命的窮地に陥る以外の何物でもない。この點、一般製造工業とは異なる經營上の難關に立つものであることも理解しておかなければならない。

3・圖書の壽命

我國は世界に於ける第三位の圖書出版數を有すと言はれる。なるほどベルヌ國際著作權聯盟會の機關誌によれば、サヴェート・ロシアの三六、六八〇種（一九二七年）を首位、獨逸の二七、七九四種（以下、一九二八年）を次位とし、佛蘭西の一五、六三二種、英國の一四、三九九種、米國の一〇、三五四種の上に坐して、我國の一九、八八〇種がある。少くとも出版統計の上では、さういふ數字が現れて來るのに間違はない。

しかし以上は、内容を點檢したものでなく、單に出版種類を計上したものである。片々たる小冊子も、取るに足らぬ俗書も、みな員に備はつてゐる。また、これらの圖書が果してどれだけの印刷部數を有してゐるか、出版總部數に於ても各國に劣らないものであるか、これは判らない。殊に世界的に難解な日本語の圖書が購讀される範圍は自ら國內に限局される。一部、中華民國に販路を廣め得る將來を豫期する人もあるが、現在では言ふに足るほどのものはない。これらの條件を考慮に加ふるとき、眞に文運隆盛を國際的に謳歌し得るかどうかは疑はしい。

試みに圖書出版數の累計比較に徴すると、最近年に於て、既出、第一表の如く一萬種内外の出版圖書（これは雑誌も含む）が刊行されてゐるのであるが、誰しも一日約二百種づゝの出版物がみな相當の内容を有するであらうとは信じないであらう。次に範圍を狭めて、圖書のみに限り、昭和年度の分を類別して示すと次の通りである。

第五表

出版圖書類別比較表（昭和各年度）

類別	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和元年
政治・法律	九四三	九七一	一、〇四五	一、二三五	一、二九一
社會・統計	一二二八	九四五	九六七	七七九	七六〇
經濟	九〇七	七二七	四八六	三七九	四〇〇
產業・交通	二九八	四九四	五五二	四七一	六七六
神書・宗教	一、二五七	一、二四〇	九二三	七三五	八一
哲學	四五五	四九八	三二七	一九一	三五二
教育・教科書	三、九一六	三、一四一	三、三八三	三、二四四	三、八八六
文學	二、六六一	二、四一八	三、〇八二	三、二七六	三、九〇〇
語學・辭書	八七七	八六九	六六九	七五七	八二三
歷史・傳記	五九五	五一七	六六四	五九〇	六二六
地誌・紀行	八五九	八四八	七八六	六七九	一、二八〇
數學・理學・工學	九七八	八九四	七〇四	六八〇	七八四
醫學	七三一	六二七	四九八	四八〇	五二七

合 計	三三、四七六	二二、二二一	一九、八八〇	一九、九六七	二〇、二二三
兵 事	一四四	九七	八一	六九	六五
美術・音楽	一、八〇〇	一、九二一	一、六〇六	一、六三五	一、四四四
家庭・技藝・娛樂	一、六二三	一、六三四	九二〇	四九一	七四六
叢書	八八	八四	一一三	一六五	七八
雜	三、二一八	三、三二六	三、〇七四	四、三二一	一、八九五

(註) 内務省警保局調査に據り、類別を便宜併合して算出す。

警保局の類別は大正十年まで三十三種、昭和二年まで二十六種、同三年は三十一種、同四年以後は三十二種となり、類別内容に幾分の變化あり。明治十四年以後の出版圖書は第一表、内閣統計局調査參照。

即ち連年、二萬種内外の圖書が出版されてゐる。一日約五十餘種を數へるわけであるが、これらが皆、眞に圖書と呼ぶべき價值あるものであつたら、それこそ奇蹟である。永久に生命のある著書は、いつの時代に於ても砂濱より眞珠を搜るに等しい。さればとて現在の出版物に悉く失望し去る要はない、俗書の蔓ること餘りに多くはあるけれども、良書の出版が全く閑却されてゐるのではない。むしろ眼あつて見る人には、篤志の出版業者によつて供給される、少數の眞珠を拾ひ得るのである。仰々しい宣傳から超然として、眞價そのものを賣る圖書も儼として存在してゐる。大量製産とは異つた價值を立派に備へてゐるのである。

ところでこの出版法によつて届出でた圖書が、全部世に行はれてゐるかといふと、さうではない。次に示す東京堂扱の類別比較が、これを物語るであらう。

第六表

主要新刊圖書類別比較表（昭和各年度）					
類別	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和元年
政治・社會	四九四	二九三	三八一	四五七	三〇九
法律	一二三	三七			
財政・經濟	二二四	一四三	一五三	一八〇	一六一
商業	七八	二三			
工業	一二六	七四	九六	一五四	八〇
農業	六三	二八			五四
哲學	一二四	二九	二三	一八二	二四一
宗教	九六	八八			
考古學・民俗學	四一	二	二三	四五	—
教育	三四一	二三九	二四〇	二四九	二〇〇
小說・戲曲	四七三	二六五	二六二	三三三	四二五
文學	二三四	二三三			
國文學	四六	五六	二〇七	二三三	二八六

合 計	四、一三六	二八〇一	二、六九二	三、〇三六	三、二四七
演劇・映畫	四九	九	一三九	一七九	二一五
詩歌・俳句	一六〇	一七〇	一二三	一二三	一二七
語學	一七三	一二五	一三	一三	一二七
國語・漢文	五八	三九	六八	八二	一〇一
作文・習字・辭典	三七	二三			
歴史・傳記	一三六	一二五	一四五	一〇九	一二四
地理・紀行	一〇七	七五			六六
數學	六七	四〇	四五	七五	七五
理化・博物	一八	九一	九〇	九六	一三三
醫學・衛生	九三	四七	八六	四二	五三
美術	一二七	七九	八〇	九〇	一一六
音樂	二五	二二			
婦人・家庭	七五	五八	七二	九二	八二
修養	二八	二二	七〇	六六	五四
兒童書類	二八六	二〇一	一七四	二四二	二七六
運動・娛樂	一二九	五二	二五	四八	八九
雜	四五	二二			

(註) 「出版年鑑」昭和六年版(東京堂編)に據り、東京堂扱の新刊圖書を累計せるもの、但し豫約出版物を除く。
 第五表との類別比較表と對照の便を圖るため、類別順序を適宜排列せり。

即ち第五表と比較して分明する通り、商品として大取次店を煩はし全國的に販賣されるものは、出版總數の二割弱しかないのである。この約四千種を以てしても、一日十種の新刊書が店頭に見れることになるが、これらが擧つて相當の賣行を見せてゐるものと考へてはまた過誤に陷るであらう。統計に現れてゐる數字を詮じ詰めて行くと、文運つひにこゝまで狹隘となつて來るわけである。

四、企業としての活字文化

資本主義時代に於ける事業經營の當然の歸結として、讀者の頭腦に交渉を持つ活字文化に貢獻せんとしてもまた、營利を目標とせざるを得ない。營利を忘れた新聞・要望に添はぬ雑誌・賣行の振はぬ圖書は、決して永續性がない。主義主張を以て活字文化に當面せんとしても、いつかジャーナリズムの坍塌に飛込んでゐる自己を發見するに留まるであらう。収益を豫期できない出版業者は自滅の運命を辿る淋しい姿を覺悟しなければならぬ。

然らば企業としての新聞發行業、雑誌・圖書出版業は、全企業界に於て如何なる地位にあるだらうか。商工省會社統計表によると（昭和三年末現在）、我國の全會社數四萬一千七百餘社、出資額または公稱資本金約百八十九億七千萬圓のところへ、新聞・雑誌・圖書に關するものは三百六十八社、約六千五百萬圓に過ぎない。即ち諸企業中に占むる活字文化事業の規模の如き、極めて微々たるものである。しかもなほ世情人心との交渉に

最も重大なる地位を占むるのは、直接、頭腦と結びつく精神的食糧なればこそである。

1・新聞事業の營利

新聞事業の収益源はどこにあるだらうか。第一に販賣收入を擧ぐることは言ふまでもない、しかしこれにも劣らぬ重要度を有するものは廣告收入である。記事掲載量に對する廣告掲載量の高率な新聞社ほど利益を多く擧げてゐることは明白なる事實であつて、記事のみ募る新聞は實は生活力が缺けてゐるのである。即ち一般商品の場合は、一錢五厘の原價のものを二錢に賣るのが常道であるが、新聞のみは一錢五厘の原價のものを一錢に賣る立前にある、これは廣告收入によつて補填されるのである。こゝに有力新聞に掲載された廣告量を示せば、次の如くである(次葉所掲)。

元來、新聞事業の考課狀は、新聞自體が他の事業に對する批判乃至忠告の痛切なるに似ず、甚だ茫漠たる内容しか示してゐない。極言すれば、ひた隠しに隠してゐる不公明な態度を平氣でとつてゐるので、普通は販賣收入に廣告收入の内譯も明瞭に知ることができない。事實また四、五指を屈するに過ぎない新聞社以外は、内容検討の俎上に横はることを回避したいであらう。これは損益計算の公表を好まないといふだけでなく、新聞の販賣部數と廣告單價とを推算し得る手がかりを與へることが一層苦痛なためであるとも考へられる。即ち新聞社自ら發表する發行部數(これは販賣部數と異なる)の如き、徒らなる示威であり、自慰でもあつて、常に公認せられざる記録として葬られることも當然であらう。

第七表

主要新聞の廣告段數表

新聞名	昭和六年六月			昭和五年十二月			昭和五年六月		
	總段數	廣告段數	記事に對する廣告比率	總段數	廣告段數	記事に對する廣告比率	總段數	廣告段數	記事に對する廣告比率
大阪朝日	五、五三八 ^段	三、二一九 ^段	五六・三%	五、五二二 ^段	三、〇九六 ^段	五六・二%	五、六一六 ^段	三、一八三 ^段	五六・七%
大阪毎日	五、三五六	二、九二八	五四・七%	五、四六〇	三、〇四九	五五・九%	五、五三八	三、〇五七	五五・二%
東京日日	五、五九〇	二、九四六	五二・七%	五、四〇八	三、一〇八	五七・五%	五、二〇〇	二、九二五	五六・三%
東京朝日	五、四八六	二、八四八	五一・九%	五、〇九六	二、八四三	五五・八%	五、〇九六	二、八八七	五六・七%
報知	四、五七六	二、一四六	四六・九%	四、六八〇	二、二七九	四八・七%	四、五二四	二、一五三	四七・六%
時事	五、二二六	二、二六五	四三・三%	四、七八四	二、四六八	五一・六%	四、五七六	二、二九七	五〇・二%
讀賣	四、八八八	二、〇一一	四一・一%	四、三二六	一、六七七	三八・九%	四、三四二	一、五七九	三六・四%
國民	四、六八〇	一、八八二	四〇・二%	四、五二四	一、九五〇	四三・一%	四、六八〇	一、八四七	三九・五%

(註) 新聞研究所報に據り、六月、十二月の分のみを掲ぐ。

新聞の排列は昭和六年六月の廣告比率順位に従ふ。この順位は、六月、十二月以外に於ても、多くの場合、大阪系四紙の相争ふ所である。

今、商工省の統計によつて活字文化事業の業績を見るに、次の如くである。

第八表

新聞發行及び雜誌・圖書出版業績表（昭和三年末）

營業別又は地方別	社 數	出資額又は公 稱資本金	積 立 金	純 益 金	配 當 金	缺 損 金
新聞・雜誌・圖書業	三六八	六五、一七、七五〇 _円	一三、七三九、四九五 _円	六、七三六、八二六 _円	三、〇〇五、二九一 _円	一、六八一、七九〇 _円
新聞發行業	二〇〇	三九、〇五二、六五〇	五、九三二、二九八	三、三一四、〇五一	一、三六七、〇一九	一、四六八、七六二
圖書・雜誌出版業	一六八	二六、〇六五、一〇〇	七、八一七、一九七	三、四二三、七七五	一、六三八、二七二	二二三、〇二八
東日本に於ける同上	二五一	四二、四四四、三五〇	八、〇四三、〇五一	三、四九八、一六一	一、五九三、六九五	一、四五六、一〇九
新聞發行業	一二七	二〇、二〇二、八五〇	七六三、〇二七	五〇九、七六九	二五二、〇三六	一、二八三、一二五
圖書・雜誌出版業	一三四	二二、二四一、五〇〇	七、二八〇、〇二四	二、九八八、三九二	一、三四一、六五九	一七二、九八四
東京府に於ける同上	一四七	三四、三五九、六〇〇	七、四九〇、五八四	三、二二三、九二六	一、四一一、九五九	九五八、九二〇
新聞發行業	二三	一二、三七二、一〇〇	二三三、四二五	二五八、七二〇	八〇、〇〇〇	七九九、〇七三
圖書・雜誌出版業	一二五	二二、九八七、五〇〇	七、二五七、一五九	二、九七五、二二六	一、三三一、九五九	一五九、八四七

（註）商工省會社統計表に據る。

「東京朝日」、「東京日々」は夫々「大阪朝日」、「大阪毎日」の支店なるを以て、東日本及び東京府の計算に加はらず。

即ち新聞業の資本金は東西相半してゐるのであるが、利益に關する限り東日本は問題にならない。「東京朝日」、「東京日々」は組織上、夫々「大阪朝日」、「大阪毎日」の支店であるから、西日本の資本に屬するのである。なほ最近の六年上半期成績を各社によつて通觀するのに、何れも營業收入は漸減してゐる、發行部數の減少といふより以上に、定價引下と廣告收入の減退に因るのであらうと思はれるが、一方、原料費の低下、人件費の切下によつて支出も手加減されてゐる。尤も殘掛金・支拂手形は何れも漸増の傾向を示し、今後とも二、三社を除いては相當經營多難の狀勢を續けざるを得まい、と窺知される。

多數の讀者から細かく集める販賣收入と、比較的少數の廣告主から纏つて集める廣告收入とは、常に因果關係を持つてゐる。といふのは、販賣部數の消長はやがて廣告單價の修正に波及するからである。こゝには新聞紙上に、如何なる種類の廣告が最も多く掲載されてゐるかを示しておかう。

第九表

主要商品の新聞廣告掲出行數表（昭和五年度）				
種 目	掲 出 總 行 數	東京十四新聞	大阪三新聞	地方九十八新聞
藥 品	五一、〇一三、八八九	七、三六九、一八五	三、〇八五、八七一	四〇、五五八、八三三
化 粧 品	三六、三三二、三九二	五、六一八、六一五	一、七二二、七五二	二八、九八一、〇三五

出版物	食料品	機器
二七、九一〇、〇六二	二四、一〇二、八九三	九、八二八、九四六
七、一六三、二二三	三、九一六、〇三一	一、七二六、四〇三
二、三七八、九一五	一、一三七、九六二	五、八三、六九八
一八、三六七、九二四	一九、〇四八、九〇〇	七、五〇八、八四五

(註) 「新聞總覽」昭和六年版に據る。昭和五年度は昭和四年十二月より同五年十一月までとす。

「東京朝日」、「東京日々」のみにて算出すれば、共に出版物・藥品・化粧品の順となり、「大阪朝日」、「大阪毎日」のみにて算出すれば、共に藥品・出版物・化粧品の順となる。

主要三十三新聞合計の大廣告主廣告行數調査によれば、出版物に於ける講談社が最上位にありて三、三八〇、一七二行化粧品に於ける丸見屋が三、三〇九、五二四行にてこれに次ぐ。

以上、出版廣告の地位に徴すれば、新聞と雑誌・圖書が、如何に深く交互に利用しあつて活字文化の普及を助けてゐるかの一證ともならうと信ずる。

なほ新聞活字の小さくなつて行く傾向は、廣告收入と密接な關聯あることを指摘しておきたい。即ち米國のアデット尺、英國のインチ尺の如く、たゞ一種の標準により面積によつて廣告料を支拂ふとは異なり、我國に於ては行數を單位に算出される。即ち活字が小さくなれば、結局それだけ廣告收入を増す原因を作つたわけであつて、同一面積に對しても從來より高い廣告料を拂ふことになるのである。

2・雑誌刊行の採算

活字文化の展望

大正十二年の大震災を一轉機として、新聞特に東京新聞の勢力分野に重大な移動を齎したが、雑誌の販賣政策に於ても、かなりの變化を來すに至つた。以前は一部當收益を成るべく多くしようとの採算から、仕上原價の低廉なることを期し、隨つて裝飾頁・本文頁も或る適度を持つてゐた。然るに大正十四年「キング」の出現に當り、最初より大量製産による原價切下を以て形式を充實しおき、大部數の消化を一舉に決して新なる地盤を獲得せんとする方針を採つた。これが一朝、讀者の要望に添はぬ雑誌として生れたなら、致命的な損害を負はねばならない筈であつた。かくして、特色ある小雑誌——内容に於て大雑誌であつても、販賣部數に於ては小雑誌に過ぎないものが往々ある——の存續を脅かし、一般に雑誌を單一・低調に追ひやる風潮を生ぜしむるに至つた。

普通、雑誌の原價は、定價の半額を目標としてゐると言つてよからう。原價には編輯費（原稿料・畫稿料・編輯者俸給等）、素品（表紙・口繪・本文用紙）、工費（組版・製版・印刷費・製本料）が含まれてゐる。雑誌によつては廣告費が多く、それだけ原價を増すものもあるけれども、新聞の場合と同じく收入廣告により支辨して餘りある採算の上に立つてゐる。

雑誌は全部賣れれば、もとより相當の收益があるに違ひない。ところがこれを妨げる種々な原因が存在してゐる。販賣店が少く雑誌を買ふに不便を感じた時代と異なり、現在に於ては發行所から直接郵送する固定讀者といふものが減する一方であるから、定價で賣られる場合は少くなつた。何れも大取次店の手を経て、全國雜

誌社に卸賣される、即ちどうしても定價の二割二、三分低い實收となるわけである。ところが更にまた返品引取といふ難關がある。雑誌は定價賣を勵行すると共に委託、商品と化し、賣殘品は發行所へ返送することが商慣習となつた、たとひそれが發送部數の五、六割といふ夥しい返品に上つても如何ともすることができない。かうなると致命的であるけれども、ともかく一定度の差損は常に見込まれてゐなければならぬのである。部數制限によつて返品難を免れようとすれば原價が高くつくことを如何ともし難いし、内容を低下して原價を安くして行けば類誌との競争に堪へることができない。然るにまた一方、この返品をなくす擁護手段からも、競争誌壓倒の必要からも、新聞廣告その他の宣傳戰に支出する豫算が考慮されてゐなければならぬ。雑誌經營者を圍む二重、三重の難關も、全く世に超えがたきものゝ一つである。

以上の説述を簡明にするため、雑誌の定價を一〇〇とすれば、仕上原價は五〇であつて賣上原價は七七、この差額二七を以て宣傳費に充て、返品差損を償ひ、かつ營業費を負はなければならない。既出、第九表によつて、新聞に於ける出版廣告の占むる位置はほど明瞭であるが、次に、出版廣告のみをとつて、新聞別に如何に掲出されてゐるかを示しておかう。これには雑誌・圖書の内譯は詳示されてゐない。しかし圓本全盛時代の變態を除いて、大體、前者がずつと高率であることは確である。

出版物の新聞廣告掲出行数表（昭和五年度）

新聞名	一年通計掲出總行数	最低行数掲出月	最高行数掲出月
東京朝日	一、三一六、〇九三 _行	(一月) 七四、四九二 _行	(十二月) 一四八、八六三 _行
東京日々	一、二四二、四九六	(八月) 七五、五四六	(十二月) 一四〇、五九三
大阪朝日	一、二四一、六五三	(一月) 六九、九七五	(十二月) 一三三、七五五
大阪毎日	一一〇五、〇四八	(一月) 六五、五八二	(十二月) 一二六、七九五
讀賣	九二五、九四二	(一月) 六〇、五二四	(十二月) 一一五、一〇二
國民	八一三、八五八	(二月) 五六、二六八	(十二月) 八八、八一七
報知	七八八、六五〇	(一月) 五二、二五二	(十二月) 九〇、三三九
時事	七八二、二八八	(六月) 五七、二六八	(十二月) 七八、八二九
北海タイムス	六三六、五九六	(一月) 三五、二七八	(十二月) 七九、二四四
名古屋	六一八、三〇三	(二月) 三一、五四四	(十二月) 八一、六八九
新愛知	五八八、〇八七	(六月) 三四、九四八	(十二月) 八三、五四六
福岡日々	五八七、五四五	(一月) 三〇、五〇五	(十二月) 九〇、六五〇

(註) 日本電報通信社調査に據り、一年通計五十萬行以上掲出の新聞を掲ぐ。これに次ぐは河北、中外商業、京城、滿州日

報、廣島中國（以上四十萬行臺）、信濃毎日（三十萬行臺）の順なり。

昭和五年度は曆年に従ふ。

なほ便宜上、第八表に新聞發行等と併記して雑誌・圖書出版業の數字を掲げておいたが、新聞發行業が西日本に於て覇を稱へてゐると反對に、雑誌・圖書出版業は斷然、東日本の、特に東京府の獨占するところである。即ち東京は、誰しも豫想する通りの雑誌の特産地である。

3・圖書出版の收益

圖書出版に於ては、その採算の單位が概して少部數であると共に、仕上原價にも餘裕が見込まれてゐなければならぬ。恐らく、その原價の三倍見當が定價として附せらるゝだらう。圖書の場合、その假裝本と特製本・普及版と限定版・大衆向と専門書とによつて、多種多様の原價計算が現れて来る。雑誌に於ては素品・工費が原價の中心となるときに、圖書に於ては初版の印刷部數が少なければ少いほど、寧ろ總版代の負擔が最も大きいものとなる。特殊の装幀による製本料（表紙・見返・扉の類の材料をも加へて）もまた少からぬ負擔であり、更に著者のための印税として定價の一割内外を支拂はなければならない。そして雑誌のやうに大規模でないまでも、新聞廣告その他による宣傳をも無視することができない。随つて圖書が初版に於て収益を得ることとは至難であつて、どうしても第二版以下、組版代が零に歸し、原價がそれだけ低下して、しかも賣行益々旺盛となる 때가即ち、圖書の生活力の確立した時である。

假に定價一圓五十錢の圖書を初版二千部印刷したとして、定價總額僅に三千圓、大取次店への卸賣實收（定價の二割五分引として）二千二百五十圓、この仕上原價は一千圓であつても、新聞廣告の一部當負擔の如き、驚くべき高率となりがちである。即ち一書のために新聞廣告一千圓を支出しても、僅に見落されぬ程度の行數を購ひ得るに留まり、決してそれで訴求力を持つたものとは言へない。かくては印税の支拂も、營業費の支辨も危いものである。こゝに新聞廣告に於ける新刊宣傳の合理化が、圖書出版業者として重大な問題となる。

理解を簡明にするため、雜誌の場合と同じく、假に定價を一〇〇とすれば、仕上原價三三、印税一〇であつて、賣上原價七五との差額三二を以て、宣傳費も返品差額も營業費も負擔しなければならない。無理な出版・アテようとする出版・邪道の出版が、たゞ資金梗塞を逃れ、或は單に運轉資金を覘つて續出することになる所以である。この負債の尻拭ひは、大抵の場合、用紙供給者・印刷業者・廣告取次業者の免れ得ないところである。

由來、定期刊行物の經營は、最も困難とせらるゝ事業の一である。毎日、或は毎月の期日には否應なしに發行されて、その成績の集積が夫々の新聞・雜誌に對する評價を築いて行く、一刻も油斷ができない。圖書の如きは定期出版でないといふ點で自重することもできるけれども、既に經常費の支出を要する營業であつてみると、おほよそ毎月幾種の出版といふ標準に於て、言はゞ種類の異つた圖書の定期出版を餘儀なくされると同様である。

昭和の初頭、後に圓本と通稱さるゝに至つた豫約出版が意想外の好成绩を挙げたのに刺戟されて以來、その最盛時には、圓本のみを以てして（豫約價一部一圓以下のものを含む）、豫約者十萬を超えたもの十種、多きは實に四十萬にも達したことがあつた。しかし苛辣なる競争が漸く激しきを加ふるに従ひ、せつかく開發された豫約購讀者の沃土を、交互に荒しきつてしまつたのは、甚だ惜むべきであつた。そして出版業者自身も、豫算面に於ては素晴しく儲りながら、總決算に於て異常の不成績を示すといふ始末まで及んだのである。この圓本の性質は即ち、雜誌と圖書の中間にあつた、といふ意味は、一種の完了期限、附定期刊行物だからである。ともかく、この圓本時代が出版事業に對して一層投機的色彩を加味することになり、或る出版業者にとつては、自殺的營業ともなつてしまつた。ひとり一般讀者に對しては、有らゆる種類に亘る廉價版出現の機會を與へ、圓本以後に出版された圖書の定價を低廉にする傾向を與ふるに至つたことは、感謝していいと思ふ。

五、活字文化の將來

活字文化のより遠き展望は、世人の眼にどう映じ來るであらうか。もとより夫々の看點により相異はあるにしても、また希望を以て展望に加ふるものあるを免れないにしても、新聞はトラスト化の傾向を強め、雜誌は大衆化の範圍を廣め、ひとり圖書は専門化の目標を掘り下げて行くことができるのではあるまいかと思ふ。次に項を分つて説き進まう。

1・新聞のトラスト化

大阪系の四紙が新聞用紙全量の三分の一を消費するとまで言はれて、新聞界のヘゲモニを握り、大資本を提げて自由に活動する結果、その販賣政策も廣告収入源培養も、追隨者の喘ぎに喘ぐを禁じ得ない状態である。しかしこの大阪系四紙の制覇時代は比較的近年の事實であつて、少くとも震災前までの東日本の状態は、「東京朝日」、「東京日々」、「報知」、「時事」、「國民」を五大新聞と稱して、實力また拮抗するものがあつた。現在の如き著しき格差の生ずるに至つたのは、一に繋つて大阪に本據を擁する兩社が震災後の活躍目覺しかつたからであつて、營利事業としての基礎が確立したのも、最近四、五年のことであると言つて誤らない。これを兩社の増資の経過に見ても、如何に加速度的な伸展を遂げたか判る。

	大正八年	大正十一年	大正十四年	昭和四年	昭和六年
大阪毎日	1,100 <small>千円</small>	11,500 <small>千円</small>	5,000 <small>千円</small>	10,000 <small>千円</small>	10,000 <small>千円</small> (拂込六、二五〇)
大阪朝日	1,500	4,000	—	6,000	6,000 (拂込濟)

抑々兩者の鎬を削る對抗意識こそ、新聞事業の發達に拍車をつけたものである。相互に微妙な特色の差異があるにしても、もはや雁行して遙に後續者を引離し、通信機關の完備（直通電話・電送寫眞・飛行機常備・通信鳩）、印刷機械の整備（一時間に四頁新聞七一八萬印刷の高速度輪轉機より、同じく十二—三萬印刷の電光機時代に移る）は、他の追隨を許さないものがある。かくして印刷時間の短縮による原稿締切時間の繰下、これ

がニュースをそれだけ新しくする、即ち最良の新聞にする。しかもこの武器を地方新聞蠶食の上に利用して、大阪系四紙の何れも地方版二十數種を有することは、全く地方新聞の脅威である。今や地方紙の孤城は、中央紙より距離の遠い土地にあるか（九州・北海道）、その發行地の特殊の事情にあるか（名古屋）によつて保護さるゝだけである。

新聞は、最良のものがあひさへすればよい、といふのは筆者の持説である、同様のニュースを幾種のより劣れる新聞によつて見せて貰ふ必要がないのである。大資本經營による少數の大新聞の隆盛と、これに及ばざる多數の中・小新聞の不振或は没落は、もはや當然の筋道であると思はれる。新聞紙の種類が餘りにも多く、しかもそれらが無駄な競争に精根を枯らしつゝ、自ら求めて製産過剰に陥りつゝあることが一層自滅への時を早めるであらう。事實上、有力少數新聞の全國的連鎖・併合時代、大阪系四紙を中心としたる讀者層の縦斷・横斷時代がやがて來るであらうと豫期するのは、決して失當でないと信じられる。

英國新聞記者協會の會長であつたロバート・ドナルド卿は、既に一九一三年に於て、新聞合同問題を論じ、「二十年後の新聞紙」を洞察して、「この合同の傾向が今後益々大仕掛となつて繼續し、日刊新聞の數は次第に減じたから發行總部數はこれに逆比して増加し、今後少くとも五十萬以上の發行部數を示し得ざる新聞は、嚴格には民衆の機關といふを得ず、ニュースに・讀物に・發行に・販賣に・巨額の資金を投じ得ざるものは追々に押潰さるゝであらう」と言つたのは、その「二十年後」に近い一九三一年に於て、全く文字通りに受取らる

るのである。

2・雑誌の大衆化

雑誌は嘗て、著しくニュース報道または論評の使命を帯びてゐた、從來新聞紙法中に包含して取扱はれた如きも、この實質を語るものである。然るに現在では、極めて少數の雑誌を除き、ニュースとは關係が斷たれてしまつた、いや、關係を有する必要がなくなつた。若しニュースらしいものが加はつてゐるとすれば、それは興味的・娛樂的に、雑誌の讀物として取扱ひ得る場合に限られてゐる。

「面白くて爲になる」ことが最も大部數を賣りこなす雑誌の標語であるが、「爲になる」にしてもならぬにしても、ともかく先づ「面白く」なければならぬ、究極するところ、大部數を賣りたいこと以外に目的はなくなつたのである。讀者に媚びる態度・懸賞で釣る方針・際どく物ほしげな讀物・連載小説で購讀を繋ぐ方策・これらが立派な表看板の影から尻尾を出してゐるのである。

雑誌經營が、大量製産にあらざる限り存続し難きものとなつた以上、この傾向はもつと激しくなり、餘弊の愈々堪へ得ざるに至るまで持越すであらう。世人の見る眼も、もり澤山の雑誌・賣れる雑誌・儲かる雑誌が權威として認められてゐるやうである。少數の識者が、雑誌の眞價と販賣部數との間に直接の關聯はない、と説いてみても仕方がない。

それにしても傲る者久しからず、一雑誌の全盛期は案外短いと言はなければならない。過去の起伏に實例を

求めると、十年一期としてよいであらう。三十年以上存続してゐる雑誌のないでもないが、その全盛期が十年以上に達するものは少い、また誌名は同じでも、内容は一變してゐるものが多い。經營者としての立場もさることながら、編輯者としての立場もまた、時流に投ずる編輯方針に全精力を傾けるならば、實際、數年ならずしてその計畫は枯渴するのが常である。

嘗て雑誌は、看板の古いものほど信用が厚かつた、今は却つて創刊の新しい雑誌に興味が持たれる時勢となつた。近代人は飽き易く忘れ易い、浮氣性でかつ健忘性なのである。しかもこの製産過剰時代では月極讀者で縛られる必要がない、毎月新聞廣告を待つて類誌と内容の比較をしてから、好きな方を購ふといふことになり、一雑誌の固定した「信者」は次第に少くなつたのである。こゝにも雑誌編輯上の難點が潜んでゐる。

雑誌界現在の混戦状態は、新聞界に於けるほど前途の見透しがつかない。それに新聞は名を成すこと難いけれども、雑誌は案外「成金」への抜け道がないでもない。たゞ大部數發行が目標である限り、流俗に阿る態度・ジャーナリズムの逆用・興味本位の編輯はどうしても避けることができない。派手な裝飾頁の多いことはこれを語り、中間記事と大衆小説の全盛はこれを語る。よみ物・告白もの・實話もの・雜文などの編輯用語が、世間にも普及してゐる状態であることがこれを語る。

要するに資本主義の發展が、營業としての雑誌經營に高踏的態度を許さなくなつたのである。そして往年、一萬部印刷の創刊號からコツコツ鰻上りに部數増加を志したものが、現在、多きは五十萬の大部數を最初に印

刷して、これを消化すべき手段として大宣傳策を講じ、一舉にして地盤を作るといふ方針に移つたことは前にも説いた。現に雜誌界を牛耳る一經營者は「世間に一歩後れた記事が雜誌を多く賣る秘訣である」と語り、他の惑星的な一經營者は「世間より一歩進んではいけない、半歩進むに限る」と語つてゐる。保守的と進歩的と、僅に一步半の間が、最も多く讀者を吸収し得る部分、即ちピラミツドの低層なのである。

しかしそれにも拘はらず、特殊の高級な讀者層を有する、専門の・尊重すべき雜誌の存在し得る餘地はあると信ずる。また實際、種々なる困難を冒して發行し續けられてゐるものもある。たゞ營利を忘るゝことができない出版業者の多くは、この廻り遠い種類の雜誌發行を忘るゝだけである。有らゆる希望をかゝる方面に寄せるといふことも、現に見る雜誌界の主潮が、娛樂雜誌・婦人雜誌・少年雜誌の三大部門に傾斜し盡してゐる反動でないこともない。一般雜誌界が、講談社的色彩に塗り籠められてゐる低調さは、何と言つても遺憾である。

3・圖書の専門化

新聞は毎日讀みすてられるものであるが、繰返し發行され、繼續して購讀される。雜誌は同じく毎月繰返して發行され、讀みすてられもするが、一誌への永續讀者は少くなつた。たゞ圖書のみは・眞に價值ある圖書のみは、讀み續けられる、讀みすてられる圖書は初めから生れなければよかつたのである、永く保存されるところに圖書の眞價は潜んでゐよう。新聞・雜誌の短命なのとは自ら異なる立場がこゝにある、即ち内容に於て最も

専門化され得る餘地がこゝにある。

新聞・雑誌はひとり大資本經營者がこれに堪へるのであるが、圖書出版は小資本にしてなほ好著を世に送ることが、至難ではあつても絶望ではない。大資本は寧ろ俗書をのみ多く世に送る、一種の名人氣質があつて初めて、儲からぬと知りつゝ特殊の好ましい圖書を同好者の手に委ねる。即ち出版良心を固く持して潔癖を失はぬ經營者の存することは、大衆本位の新聞・雑誌界には見られぬ事象である。夫々の出版業者には色彩がある、ちがつた圖書が刊行し續けらるゝに拘はらず、或る統一的傾向が明白になる、そこに著者の系統も自らにして定まる、特色と信用とがまた、この間から生れる。圖書出版の正道は、資本主義的經營からは案外遠い所にあると思はれる。

新聞・雑誌の上に、繰返し讀むに値する部分があれば、きつとこれを圖書化する出版業者が現れる。寧ろ新聞・雑誌の紙面は圖書出版の苗圃である場合も多い。所詮この三者は夫々特質を異にするにしても、淺からぬ活字の因縁に結びついてゐる。

「出版業者に二代なし」。出版物は單純な消耗品でなく、頭腦と交渉を有しつゝ常に新なる商品を創作して行くのであるから、機械的製産の完備だけでは何にもならぬ。組織の力だけでは大量の出版はなし得ても、良質の出版は期待し得ない。特に圖書出版業者としては、多分に趣味・性格・信條の現れが必要である。嚴密に言ふと、出版業者の資格と見識とは、時に著者以上でなければならぬ。苟くも儲かる見込あるものは種類を問

はず出版せざるなし、といふ資本家根性は排撃せらるべきであらう。出版が行詰ると、必ず際物と性慾物とに落ちて行く、これは出版業者として墮落の一線であることを警戒しなければならない。

要するに今後の圖書出版は、大量出版の方面と専門出版の方面とに區別がはつきり分れて行くであらう。そして賣行による營業成績自體よりは、出版物自體の價值如何によつて、その經營者に對する尊敬は深められて行かなければならない。新聞發行は工場設備と密接不離の關係に立ち、雜誌刊行も大印刷工場との聯絡が緊切でなければならぬ。ひとり圖書出版に至つては比較的簡單である、よき著者と結び、よき原稿を手に入れさへすれば、大きな設備は何も要らない、用紙は紙業者より指定の印刷工場へ、そして製本が出来れば大取次業者へと送り届けられれば済む。即ち小資本を憂へず、出版頭腦貧しきを憂ふとも言ひ得る所以である。

六、結 言

新聞・雜誌に關する事業は單純なる消費ではない、衣食に屬するものではない、常に國民の頭腦的食糧として文化に寄與するものであるとは、隨所に繰返して述べた。故に筆者は、その外形の繁榮・量的の普及を必ずしも悦ばない、寧ろその内容の充實・質的の浸潤を切望するのである。製紙業・印刷業がほど合理化に事業を經營し行かると拘はらず、出版業のみは著しい投機的色彩に暴されてゐることを深く憾みとする。よき出版が必ず酬いられる時勢にならなければウソだといふ氣がする。

實際、「アカ」に屬する新聞・返品となつた雑誌・消化されない圖書に至つては、甚だみじめなものである。工費を加へて印刷された用紙は、白紙よりも廉くなる、いや、紙屑として取扱はれる。金のかゝつた装幀は、もとの原料そのまゝの方が遙に高價なのである。賣れない出版物こそは、此上もない浪費である。それも無價値にして賣れない場合は當然の應報であつて、それが誤つて賣行くところ却つて呪はるべきであるが、存在理由を有するものゝ營業成績思はしからざるに至つては同情に堪へない。筆者は、よき出版物なら、利潤なきまでもその勞に對して必ず酬いらるゝだけの收入の道が拓かれんことを切に希望する一人である。

今、全國に於て書籍商組合に加入してゐる書店は實に一萬四千名を超え、また圖書館數は實に四千六百に近い。これだけの味方を有しながら、良心的出版事業が、何故經營難に陥らなければならないのか。しばらくこれを左表に徴せられたい（次葉所掲）。

以上の組合員が必ず二冊づつ雑誌を賣盡してくれるなら直に三萬部の固定讀者が生れ得るのである、優に採算のとれる特色ゆたかな雑誌が創刊されるだらう。以上の圖書館のせめて半數でも、よき出版物なら必ず一冊は備付けるといふ目標が立つときに、今までよりも遙に内容的な圖書が安心して陽の目を見るであらう。残念なことには圖書館の豫算は、經常費七萬圓以上四、二萬圓以上十九、五千圓以上七十二、五百圓以上百二十四（『日本圖書館雜誌』に據る、昭和五年度）に過ぎず、恐らくこれには、かなりの人件費をも含むものなるべく、圖書購入費に至つては、大部分、好書の一人のそれにも如かないのである。

第十一表

全國圖書館及び書籍商組合員表									
地方別	圖書館數			藏書數及び閱覽者數		書籍商總合員數			
	計	公立	私立	藏書冊數	閱覽人員				
北海道	一七	一〇	七	一六二、六七九	三六五、七五八	七七六 (五二五)			
青森縣	一五三	四七	一〇六	一二九、七六二	二八七、八七八	一五一 (九二)			
岩手縣	二〇九	一八六	二三	一四二、九八二	一八三、三八一	一三九 (九八)			
宮城縣	一二三	一六	六	二〇五、三八七	四三一、二五一	一二八 (九九)			
秋田縣	三一	二九	二	一七六、五一六	三三三、五九六	一二八 (一〇三)			
山形縣	一六七	八七	八〇	一四五、二八八	二九八、八一三	一三〇 (九一)			
福島縣	九一	三五	五六	一九一、三六七	一二九、九三七	一四八 (一〇八)			
茨城縣	八五	四六	三九	一四六、三二〇	一三七、七六六	一七二 (一一〇)			
栃木縣	三〇	二七	三	七〇、六二七	九〇、六三二	一六八 (一一一)			
群馬縣	一八七	三〇	一五七	二三六、四九八	五一六、二四七	一四五 (一〇三)			
埼玉縣	二三八	二五	二三	二四五、二七一	五〇五、四四三	一七一 (一一四)			
千葉縣	八二	七〇	一二	二〇五、三五〇	二五九、四四九	二二八 (二〇〇)			
東京府	二八	二三	六	六五〇、六七二	二、一〇〇、八九九	三、三七四 (二、四五二)			
神奈川縣	四二	二四	一七	八四、八六六	二九六、八八四	三五〇 (二二六)			
新潟縣	二〇六	一〇八	九八	四一三、九〇〇	九〇六、二五八	三一九 (二四六)			

富山縣	石川縣	福井縣	山梨縣	長野縣	岐阜縣	靜岡縣	愛知縣	三重縣	滋賀縣	京都府	大阪府	兵庫縣	奈良縣	和歌山縣	鳥取縣	島根縣	岡山縣	廣島縣	山口縣	徳島縣
四三	一七七	二二	二二	二二	五一	一四一	六五	六〇	三三	一一	一七	六九	六一	二二	六	四三	一〇二	三五二	二六一	六〇
二三	一五九	五	二	六四	二五	八三	四四	三一	一五	七	九	四九	五六	二〇	三	二七	五六	三三三	二二〇	二五
二二	一八	一六	九	一六七	二六	五八	二二	二九	一八	四	八	二〇	五	三	三	一六	四六	一九	四一	三五
一七八、三九四	二三五、七九八	七八、七三五	七〇、五八〇	三八九、八一五	八八、四三三	一三九、七九六	四一三、二六九	一四七、五六八	二三五、八三三	一五二、二八八	二八八、五一	二二九、八一	一七五、六六四	六九、三三〇	八、四〇七	一二〇、七四七	二七七、一六七	二六四、二四一	五二八、〇三五	八〇、三二七
四四六、七〇二	八二五、七〇九	一二、一四七	三三、四一七	五四九、七五六	一九三、三七九	三八一、四〇三	八三四、五八三	二二五、二三三	九五、五二九	一八八、八三六	一一〇、四二五	六五六、一八九	一八六、二五〇	八四、一六〇	五、九二五	一〇三、四七三	一二五九、四五七	五八五、三七〇	一、〇〇四、二五四	一八七、〇七三
二三	二〇七	九七	七六	二二五	二二七	三八九	四三二	八五	一三六	六二六	一〇八八	四八二	八三	一九八	九〇	一三六	一七八	三三二	一九九	九四
(一五〇)	(一七四)	(八五)	(五九)	(一八四)	(一八五)	(一六三)	(三三二)	(七〇)	(一〇二)	(四八〇)	(六八九)	(四二一)	(七〇)	(一七五)	(六三)	(五六)	(一六六)	(二八〇)	(一五〇)	(八〇)

地方別	圖書館數			藏書數及び閱覽者數		書籍商組合員數
	計	公立	私立	藏書冊數	閱覽人員	
香川縣	一一三	一〇〇	一三	二二三、〇〇七	八五八、六八一	一〇七 (五七)
愛媛縣	一二二	六	六	九一、三四六	三二五、四〇六	八 (七六)
高知縣	九七	九三	四	一二九、一五八	三〇二、八六九	八二 (七五)
福岡縣	三〇六	二九五	一一	二九二、一七六	九二九、七九六	四四三 (三二〇)
佐賀縣	一〇六	四三	六四	八四、五四七	二八一、三六九	一一六 (七七)
長崎縣	九〇	八二	八	一三三、六三九	五二五、三八六	一六四 (二二〇)
熊本縣	一四三	一三三	一〇	一四六、一六九	一、一六七、四四二	二七〇 (一八四)
大分縣	三四	一四	二〇	八五、五一七	一九三、五七〇	一四二 (一〇四)
宮崎縣	七〇	六八	二	八六、六四三	一九九、七八三	六五 (六一)
鹿兒島縣	九二	八四	八	一〇一、七三七	七二四、三三八	一八四 (二七六)
沖縄縣	三	一	二	二三、五一六	四五、五六九	二二 (一)
樺太	一	一	一	一	一	五六 (一)
滿洲	一	一	一	一	一	七五 (五六)
朝鮮	一	一	一	一	一	二九一 (二三〇)
臺灣	一	一	一	一	一	七一 (五一)
合計	四、五九〇	三、二二四	一、三六六	八、七七七、六六九	二一、三四〇、四八〇	一四、二五二(一〇、三八三)

(註) 圖書館數は昭和五年四月末現在、藏書冊數及び閱覽人員は昭和四年度分にて、共に文部省社會教育局の調査に據る。
各學校附設の非公開圖書館はこの統計に加はらず。

書籍商組合員数は昭和六年四月末現在、括弧内は昭和元年九月末日現在にて對照に便したるもの、東京書籍商組合の發表に據る。同一府縣内に二組合あるは東京府及び愛知縣のみなり。

せめて雜誌は一萬部の固定讀者を有し、圖書は二千部の必要を見込み得るならば、我國の活字文化も、現在のやうな上りの仰々しさから救はれて、如何に内面的な良質のものに移つて行か、想察に難くない。

新聞は一紙にして小學より大學、進んで社會全般を縦斷的に包容する、随つて少數のよき新聞の繁榮で事は足りる。雜誌は種類によつて幼年者より老成者まで、素養のまゝに横斷的に讀者層を作る、随つて各層の段階的種類を必要とする。圖書に至つては縦斷的にも横斷的にも、有らゆる専門部面に亘る供給を使命として、單調を厭ふ本質を有してゐるのである。

出版界でも、とかくグレシヤムの法則が働きがちであつて、惡書でないまでも、俗書は良書を驅逐する。筆者は切に、良書の生活力が保障されるに至らんことを冀望して止まない。活字化される限りのもの、何れも保存に堪ゆる眞價を有するやうになつたとき、如何に無上の會心事であらう。新聞はジャーナリズム本來の面目を發揮し、雑誌は厚きを誇らず適度の必要頁を越ゆることなく、圖書は如何なる新刊も信賴して讀まれるに至つたなら、恐らくこれ活字文化の黄金時代であらう。

嘗て筆者は「出版年鑑」一九二七年版（國際思潮研究會版）に「大正十五年度出版界所感」を求められて、次のやうな答稿を寄せたのであつた。

一、模倣時代だといふ氣がします。

或るすぐれた出版業者の創意によつて出来あがつたものが、營利的にも幾分の成功を示すと、すぐその後から同種の出版計畫が續出します。もう少し他の創意を尊重して、自ら信ずる方面に全力を盡すやうにするのが、出版良心ではないでせうか。

一、生産過剰時代でもあります。

内務省納本の毎日の出版種類が現在の程度に多い以上、どんな熱心な讀者でも、圖書館でさへも、これを消化する能力がとてもない筈で、その出版物が餘りに玉石同架でありすぎます。結局、讀者全般の教育程度が増進して自然淘汰の餌食になるまで、かなり不生産的出版が繼續されるものゝやうです。

一、不熟の出版が多いやうでした。

一般財界の不況に伴ふ出版業者の焦燥から、いろんな計畫が、かなり慌てすぎて次から次へと發表され、現に金融上の考慮によつてのみ濫造されたやうな出版物も少くなかつたやうです。もう少し完全に熟した、讀者に中毒を齎らさぬ程度のものが欲しかつたと思ひます。

一、しかし何と言つても進歩です。

缺點を數へるといろいろありますが、常に自重して良書刊行に努力された尊敬すべき同業者も決して少くはないのですから、一般讀書界を進歩させた事實は否むものでありません。すべての「時代」はやはり缺陷を

伴ひつゝも進歩すべきもので、出版界のこの一年も、同じ過渡時代を経つゝあつたと思ひます。

以上の所説が、今日に於てなほ一言をも訂正する必要を見ないことを甚だ遺憾とすると共に、この忠告がいつか容れられることを深く期待するものである。

(附言) はじめ本篇は、八部より成る豫定をもつてゐた。「活字文化の特質」と「企業としての活字文化」の間に、「四、活字文化の功罪」を加へて、「1・ジャーナリズムの利弊」、「2・販賣價值と實質價值」、「3・高價版と廉價版、特に圓本の考案」に及び、なほ本篇の後に、「新聞・雜誌・圖書に關する比較年表」を附載して、簡略に過ぎる本篇の記述の補遺とする準備を進めてゐたのである。しかし、與へられた豫定頁數は既に遙に超過したので、共に削除するに決し、別の機會を待つことにした。